

氏名	KIM Young Jin (私 ヨジン)		
学位の種類	博士(芸術)		
学位記番号	甲第 41 号		
学位授与日	平成 23 年 3 月 31 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
論文題目	イメージの論理～錯視と想像力をめぐって —造形的要素 (錯視、連想、歪曲等) による シュルレアリスムのイメージの制作と可能性についての研究—		
審査委員	主査 教授	中村 隆夫	
	副査 教授	本江 邦夫	
	副査 教授	渡辺 達正	
	副査 東京都美術館 専門調査員	河合 晴生	

内 容 の 要 旨

近年、時代変化のサイクルがどんどん速くなっている。毎日のように新しい技術が世に出、その新技術がすぐに応用され、新製品が続々と出現している。そこに私はこんな疑問を抱く。これほどの速度で創造が繰り返されたら、いつか人間の創造力は枯渇してしまうのではないかと…。

結局人間の創造力は枯渇することはないが、時代の発展速度について行けず、フラストレーションが持続する可能性がある。

私は創造力の最大の源泉は人間の無意識に存すると思う。その無意識から創造的な何かを引き出すために、無意識の範囲を区切り、規則性を見出し、定式として整理してみる必要がある。しかし無意識を完全に把握することは果たして可能なのだろうか。無意識が完全に把握されたということを仮定する時、その時も果してそれが無意識だと定義することができるのだろうか。

1924年にブルトンが発表したシュルレアリスム宣言に立脚したシュルレアリスム美術と、長い歴史を持っている錯視による美術などは、人間が意識できなかった未知の部分、すなわち無意識の中に表現の可能性を見出してきた。そして人間の無意識とその無意識の表現であるイメージに論理を与え、人間の視覚と、その視覚を受け入れ分析して判断する脳の認知、そして判断能力との関係を体系化してきた。

シュルレアリスムでは精神医学分野であるジークムント・フロイトの理論が重要な位置を占めていて、視覚を知覚するアルゴリズムにおける様々な錯視に関する数学的な理論

やゲシュタルト心理学等が、シュルレアリスム的な美術における視覚的価値を裏付けしてくれているように思う。

シュルレアリスム宣言より少し前の1921年にドイツのヴェルトハイマー(Wertheimer)によって主唱されたゲシュタルト心理学は、視覚現象と視覚芸術などを分析して、人間の無意識と視知覚についての研究に合理的で体系的な理論を構築した。

フロイトとヴェルトハイマーによって人間の精神と認識の構造に理論的土台を構築され、それを視覚的結果物である美術作品として表現したのがシュルレアリスム的な美術だといえる。

人間の視覚情報と認知能力には限界が存在し、完璧ではない。シュルレアリスム的な作品はむしろその不完全性に注目して、その不完全性を無限な創作の源泉にしている。人間の意識は永遠に不完全であるしかない。その不完全性を認識して乗り越えることが可能だということは、視覚芸術が持つすばらしい長所のひとつであると思う。

このようなシュルレアリスム的な美術が持っている根本的な価値は、現在でも、そして未来においても有効であると思う。しかし私が感じている最近のシュルレアリスム的な美術は、過去の巨匠たちの影響から脱することができないように見える。人間の無意識という枯渇しない泉を武器にするシュルレアリスム的なイメージの作品が、どうして創作の枯渇状態に陥ってしまったと感じられるような状況になってしまったのだろうか。

その理由として、過去においては無意識の範疇に属していた思考が現在には徹底的に暴かれ、研究され尽くし、既に意識の範疇に属するようになったことが最大の原因ではないかと考えられる。

既に認知の範囲内で分析され、活用されている無意識は、もはや無意識ではなく、意識に属してしまうと思われる。新しい方式の、あるいは未だ掘り起こされていない無意識を発見し、引き出すことが可能であれば、最近のシュルレアリスム的な思考を基本とした作業に見られる問題は、ある程度解決可能だと考えられる。

私はこの論文でシュルレアリスム的な要素を持つ美術作品を、ゲシュタルト要因の観点からイメージの論理を分析し、シュルレアリスム的な美術作品と錯視を利用した美術作品が人間の無意識をどのように利用してきたのかを考察する。それによって、彼らが利用した方法が何だったのかを再認識でき、無限な創造力の源泉である無意識に対する新しい方式での接近が可能になると思う。

そして個人的無意識（主観的無意識）と社会的無意識（客観的無意識）を比較するとしたら、社会的無意識（客観的無意識）の方がイメージとしての発展の可能性が大きいと思う。シュルレアリスム的な絵画が個人の無意識（主観的無意識）を中心に考えることによって壁にぶつかったとしても、これを社会的無意識（客観的無意識）の目で見直してみれば、新たな打開策が見つかるのではと考えられる。それ故に、主観的無意識ではなく客観的無意識を応用したシュルレアリスム的な作品を主として分析し、体系化の方法について考察する。

その結果得られたものを理論的土台とし、無意識と想像力による自由かつ合理的な思考を通じて、如何に自分の想像の世界をイメージ化させることができるかが本論文の主題であり、また私の制作の目的である。

審査結果の要旨

1. 作品について

金英眞君の銅版画の作品に関して、まず版画家としてのテクニックが抜群に優れていることを挙げなければならないだろう。あれだけの緻密な線描を可能にし、構図としても見事にまとめ上げることができるのは、希有な才能の持ち主だけに与えられた特権ともいべきである。

次に特筆すべき点は、彼のイメージに対する特異な才能がある。まず第一に驚かされるのは、彼のイメージの記憶力である。論文ではこのことについて触れられていないが、ある状況下で何日間も金君は何もすることなくじっとしていなければならないことがあった。彼が行ったことは、過去に読んだ本を頭のなかで1ページずつ読み返すということだった。後で調べてみると、一言一句間違いがなかったとのことである。このような経験をしたのは彼にとって人生で最初で最後のことだったが、この事実に関しても驚いたとのことである。

人間には脳をスキャナーのように働かせて、とにかく眼で見た文字などをイメージとして脳に焼き付けることができる人がいる。おそらく彼もそのひとりである。このことはイメージに対する異常なまでに発達した記憶力と、それを自在に反芻することのできる能力があることを意味する。

金君にとって通常の論理とはまったく異質なイメージの論理に従う。論文にも書かれていたことであるが、小学校生の頃、授業中に尿意を催し我慢をしていたところ下腹部に痛みを感じた。これを我慢するために描いた絵が、膀胱に小人がいて、尿意を催すと水が溜まり、苦しくなった小人が壁を引っ掻いて首を上に出そうとする。彼は尿意を我慢したときの痛みをこのようなイメージでデッサンし、描くこととによって痛みが治まった。金君のイメージによる論理は非科学的である。しかしイメージの論理によって充足されるものがあるというのが、彼がイメージに固執する理由である。

制作する際に何も考えずに線や点を描き、それがあつ何かに見えてきたときに、それが存在するためには何が必要かを考え、次から次へとイメージによる論理が展開が展開されていく。その結果が彼にとってひとつの版画作品となる。彼の作品はイメージの展開のユニークさが顕著で、テクニックの見事さに裏打ちされた密度の濃い世界を現出させる。

金英眞君が今後版画家として素晴らしいキャリアを積んでいってくれるに違いない。それだけ見事な作品を制作する。

2. 論文における独自性

このようにイメージそのものを大切にしている金君であるため、作品のなかには濃密なさまざまなイメージが彼独自の論理によって結合される。彼にとって大切なのは、このイメージの濃密さである。版画作品で作品サイズの大小を云々することがあるが、彼はそれを不問に付す。大画面の作品の場合は距離をとって鑑賞し、小画面の場合は近づいて鑑賞する。小画面の場合は、細部までも十分に眺めようとする。サイズの大小にかかわらず、作品のイメージの密度の濃さ、情報の量こそが重要であると金君は指摘する。

また版画にとって常に重要な問題が、複製可能な芸術であるということである。ベンヤミンが『複製技術時代の芸術作品』で提起したアウラの問題に関して、彼は独自の論点から反駁する。多くの情報量を含むイメージそのものが重要なのであるから、複製可能であろうと、コンピューターによって版画作品のイメージが提起されようと、アウラの減少はあり得ないというのである。そもそも版画にとってオリジナルとは何か、版であるのか、そうでなければ擦られた版画それぞれがオリジナルである。従ってイメージがどのような媒体の複製品になろうとも、イメージそのものはそこに存するので、アウラが減少することはないのだという。版画制作者である金君ならではの論理展開であり、興味深い論理である。

もうひとつの独自性は、シュルレアリスムのイメージの論理展開の考察にある。今日ではシュルレアリスムのイメージの論理は枯渇してしまっているように感じられるのは、無意識そのものからイメージを紡ぎ出そうとするからであると指摘する。オートマティスム、フロッタージュ、デカルコマニーなどシュルレアリスムの代表的な技法に依存するものを、「主観的無意識」によるシュルレアリスム、理性的な操作を伴うマグリット、ダリ、エッシャーなどの画家を「客観的無意識」によるシュルレアリスムであると金君は分類する。この分類の仕方は新しいといえるし、「主観的無意識」、「客観的無意識」という言葉自体も心理学用語にはなく、彼独自の経験による造語である。イメージが枯渇してしまったと彼が考えるのは前者であって、後者には想像力の可能性を充分発揮できる余地があるという。

その方法として彼が拠り所としたのは、ゲシュタルト心理学に見られるゲシュタルト要因である。金君はマグリット、ダリ、エッシャーらの作品をゲシュタルト要因に分け、その手法を分析する。金君のイメージに対する優れた感性、特異な記憶力、分析能力が充分発揮された興味深い章になっている。

3. 論文における欠点

イメージに対する能力が優れているため、多くのことを自分なりに飛躍させて考えてしまう傾向がある。シュルレアリスムを「主観的無意識」、「客観的無意識」に分類するのは良いが、その前にシュルレアリスムの特徴についてある程度詳しく言及しなければなら

い。基本的にシュルレアリスムといえば、金君の分類によれば前者が圧倒的に多いので、「シュルレアリスムの意義とその限界」について歴史的な考察をしておくべきである。さらに「主観的無意識」、「客観的無意識」とは何かを充分説明しておくべきであり、歴史的にこれと類似した概念が存在しなかったのかということにも言及しておくべきであろう。さらにマグリット、ダリらの作品分析もゲシュタルト要因に分析するだけに終始している。数学でいえば一種の因数分解を行ってみただけという印象は否めない。またゲシュタルト心理学について、もう少し説明すべきである。今から40年ほど前にゲシュタルト心理学を口にする人はいたが、現在ではほとんど耳にすることはない。ゲシュタルト心理学の長所は何か、その限界はどこにあるのかということを理解し、論文でも説明しておくべきである。

こうした点を補強することができれば、さらに優れた論文になったと思われる。

4. 総合的な評価として

作品に関しては博士後期課程の学生として見れば、これほどの学生は滅多に入学してこないだろうと思うほどすばらしい。論文に関しては上述したように、自分のイメージに関する特異な才能に頼り過ぎている嫌いがあり、論理を構築するという面では弱さを露呈している。しかしこうした弱点を補ってあまりあるのは、版画のオリジナルとは何か、版画においてはアウラは減少しないという独自の論理の展開、そして何といても金君のイメージに対する特異な才能による作品分析である。これがあることによって、論文に説得力が加わっている。総合的に見て、金英眞君は博士号を取得する資格があると判断できる。